

# 米山梅吉記念館 館報

2011  
(平成23年)

春

Vol. 17



1880年代のサンフランシスコの町並み

(入間市博物館 藏)

キリスト教フランシスコ会の創設者、聖フランシスがその町の名前の由来と言われるサンフランシスコ。ゴールデンゲートブリッジ、フィッシャーマンズ・ワーフ、チャイナタウン。今も観光客の絶えないこの町は、坂の多い町としても有名である。1848年のゴ尔ドラッシュで人口が爆発的に増加し、この富を元に金融業も盛んになる。そして、1869年には大陸横断鉄道が開通し、通貨と物流の行き交いが広がり、町は大いに発展した。

「桑港當着スルノ日午前十時頃、カスカニ三島顯レ往來スル帆船見ル。其時ノ喜ビ何ト云フベキ方ナク恰モ「コロンビスカ」亜米利加ヲ發見セシ時カクヤト思フ計リニ候」これは、米山より二年程前に、サンフランシスコに到着した、相川之賀（1866年生まれ）が両親に宛てた手紙に書かれたものだが、正に彼らは、コロンブスの気持ちで新天地に降り立った。そこでは「自由ノ國ノアリガタサ」を満喫しつつも「朝ナタナニ盥洗ヒ」をしての生活だった。

8年間のアメリカ生活で出会った人々、過ごした時の流れは、その後の人生に、計り知れない影響を与える。サンフランシスコの坂の上にたなびいていた大きな雲は、少しずつ米山の手に近づいていくことになる。



財団法人 米山梅吉記念館



## 館報第17号発行に際して

理事長 渡邊脩助

昨年の夏は猛暑でした。今年の冬は豪雪です。地球環境の異状、悪化と、日本の行き詰った政権への期待のもてない失望と落胆、経済の低迷、負インフルエンザ、火山噴火、そして大地震といった人知の及ばない自然の猛威など、明るい話題がみつかりません。全国のロータリークラブ、ロータリアンの皆さん、年度終末、そして新年度に向ってのご準備で、日々ご多忙のことと存じます。日頃のご協力にお礼を申し上げ、米山梅吉記念館よりご挨拶を申し上げます。

国際ロータリーは第2世紀に入り、このところ急激に変わりつつあるように感じられます。例えばR.I.の發表した「新長期計画」、ロータリー財団の「未来の夢計画」等、矢張り早く発表されるこれらのプランは、消化不良を起こし、ついでゆけないと感じる会員も少なくないと思われます。ロータリーには「変えてはいけないもの」と「変えなければいけないもの」があると考えてきました。そして簡単に云えば「変えてはいけないもの」とは、職業奉仕の思想を中心としたロータリー精神・哲学であり、「変えなければいけないもの」は、地区、クラブの組織や運営方法、「新長期計画」「夢計画」などだと思います。この「不易と流行」とをしっかりと整理・区別して、誤りなく選択してゆかねばならないと考えます。

2011-2012年度カルян・バナルジーR.I.会長エレクトは、新年度のテーマとして「Reach within to Embrace Humanity」、日本語訳で「ここの中を見つめよう 愛を広げるために」を発表されました。次期R.I.会長はインドのご出身ですから、いかにも抽象的、哲學的思考を好むインドらしい言葉ですが、正直なところ難解で理念や方向がまだ見えませんが、「ロータリーは世界と共に変化して成長していくなければならない。ロータリーの物語は幾度も書き換えねばいけない。」と

いう、ポール・ハリスの言葉が聞こえてくるようです。

私達のロータリーの仲間である田中作次氏が、2012-2013年度のR.I.会長に就任することが決まりました。日本人として3人目であり、30年振りのR.I.会長です。韓国、インド、そして日本、R.I.の代表が続けてアジアから選ばれるということは、世界のアジアに対する期待、アジアが世界の中で果たす役割の重さを示す証でもあります。私達の活動すべてが田中氏に繋がっていくと思うと、身の引き締まるとき同時に、心弾む気持ちになります。ご活躍を期待するとともに、私達は情しまぬ協力を努めなければなりません。

昨年、記念館創立40周年の記念事業として、旧館を改修して立ち上げた米山文庫には、色々な人が集まっています。親子連れや、子ども達がグループで、また地域の人達のつどいの場として、大いに活用されています。文庫に携わっている私達も米山文庫の復活を喜んでおります。

記念館の公益法人への移行は、今年7月1日を予定しておりますが、諸手続きがスムーズに行くことを願っております。公益法人になりますと、皆様からのご寄付等も税制上の恩恵が受けられるものと期待しております。

梅は咲いたか、桜はまだか。記録的な豪雪になつた今年の冬でしたが、記念館の梅の木は、例年にも増してたくさんの花をつけました。次は桜。暖かい春が来るのを待っております。先行きの不安を嘆くより、世界で、そして地域で、私達ひとり一人の奉仕の花を咲かせましょう。

今後共、全国のロータリアンの皆様には、米山記念館へのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

多くのロータリアンのご来館をお待ちいたしております。

## 秋季例祭



■日時 2010年9月18日(土)

■会場 米山梅吉記念館ホール

●例祭及び墓参

●例祭式典

●記念講演

演説 「ロータリーの曙」

講師 田中 裕氏  
(尼崎西RC)

●アトラクション

往年のジャズピアニスト

菅野邦彦氏

●懇親会

## 記念 講演



## ロータリーの曙

講師 田中 裕

日本にロータリーをもたらすきっかけを作った福島寅三氏は、1881年佐賀県有田町生まれ。一つ橋大卒業後三井物産に入社。1905年度米。1912年頃、ダラスの三井物産現地法人サザン・プロダクツ社支配人に就任。同社社長がダラスRCの会員であったため、1915年頃、アディショナル正会員としてダラスRCに入会。その後、社長が第一次世界大戦勃発によりドイツに引上げたので、正会員として1920年まで同クラブに在籍した最初の日本人ロータリアンです。

米山梅吉は1868年東京生まれ。祖津中学在籍中家出同然に上京、青山学院の前身である英語学校に進み、1887年に渡米。シカゴ万博の日本館で認明係を務めた時、万博を訪れたP・ハリスと顔をあわせた偶然も想像できます。

帰国後、30歳で三井銀行入行。そこで先進国から新しい金融制度を導入するプロジェクトに携わったことで頭角を現し、神戸、大阪支店長を経て、常務取締役、三井信託銀行社長にまで出世します。1917年10月に政府選定財政経済委員の一員として渡米した際、1918年正月をダラスの福島宅で過ごし、業内役を務めた福島から聞いたロータリーに関する話を聞かせてます。

1920年1月に帰国した福島は、国際RC連合会議

長から、年度内に日本にRCを設立してほしいという大特別代表の委任を受けて奔走。年度末までにチャーターメンバーを集められず、期限切れとなります。福島から協力を依頼された米山は、財界の面々に声をかけ、1920年10月20日、チャーターメンバー24名により、東京クラブが誕生。初代会長には米山梅吉、幹事には福島喜三次が就任します。

当初、東京クラブの例会は月一回。たびたび資金出し、出席率も悪く、規約に対する关心も薄かったと言われています。会費は、当初年額120円、1924年に200円、1929年300円に改定されました。



1921年の例会風景

福島は僅か二回例会に出席し、1921年3月大阪へ転勤に。それを機に、関西財界人にロータリーに対する興味が高まり、1922年11月17日、チャーターメンバー25名によって大阪クラブが創立されます。初代会長は星野行用、副会長村田省蔵、幹事福島喜三次です。R Iからの加盟承認は1923年2月10日、登録番号は1349です。大阪クラブの例会は、1923年8月から毎週開かれ、管理運営面の充実、出席規定の遵守、例会の時間延長等が積極的に実行されました。

1923年9月1日、関東大震災により、首都圏は死者9万人、負傷者10万人、焼失68万戸、全壊1万1千戸、という壊滅的な被害を受けました。R Iの対応は迅速で、9月4日にはR I会長から歓迎の電報が届きます。9月10日にはサンフランシスコRCより1,000\$、翌11日にはニューヨークRCから1,000\$の義捐金が到着。相談の結果、義捐金は東京RCが受け取ることになります。その後、世界中のRCからの義捐金の合計は最終的に42,000\$(現在の物価に換算して約50万\$)に達します。内訳は、世界合計16ヶ国、503クラブに及びました。当時の為替相場はY100=US \$49、物価指数1000とすれば、現在の価格にして約1億円のプロジェクトとなります。

この時建設された当時最新施設の孤児院は、Rotary Homeと命名され、1924年10月10日に完成し



ロータリー・ホーム（1924年10月）

ました。この建物は、その後戦災によって焼失しました。

日本に地区を設ける希望が高まり、1928年7月、朝鮮、満州を合わせた第70地区が、R Iより正式承認を受けます。とはいえ、当時7クラブしかない地域を地区として承認することには無理があり、日本の独創的な提案にアジア各地のクラブからの反響もあり、R Iもしらしむし了解したということが真相のようです。

奉天クラブの提案で、1930年5月より、手書き翻写版刷りのガバナー月信が発行されます。井坂ガバナーからガバナー月信が書かれた、という説は間違いで、米山ガバナー2期目の後半からガバナー月信が出されています。1930年5月～1931年3月までは「コンフェレンスまで」、1931年4月～6月までは「コンフェレンスのあと」という前題がついています。表紙には、ガバナーに三度選ばれたことが、米山の自筆で書かれています。実は、これを坂本豊美PGが発見された直後、私が米山記念館を訪問。旧漢字を一つ一つ拾って、それをデジタル化する作業を行った経緯があります。



1931年の満州事変を契機に、日米間の蜜行きは怪しくなり、1933年の国際連盟退場によって決定的になります。ロータリーの本部がアメリカにあるという理由で、軍部や官僚からの圧力を受けます。ロータリーはアメリカのスパイである、フリー・メーリーであるといった批判に対し、ロータリーのモットーService above selfは誠実奉公である、と反論したという記録が残っています。

この批判を避けるため、R I B IのようにR Iの中央集権の組織から離れ、国家単位で管理しては、という意見が起ります。1935年の地区大会でサットン元R I会長にその旨を申し入れますが、色よい返事は貰えませんでした。この大会で、新作の日本語のロータリーソングとして、「奉仕の理想」と「わかれの生業」が発表されます。

ロータリー運動に対する官憲の介入は厳しさを増し、例会が監視下におかれ、米山や地区幹事芝は再三特高の取り調べを受けたと言われています。この嫌疑を晴らすため、R Iの中央集権化から離れ、日本独自の地方的自治分権組織を作らざるを得ないという結論に達します。日本のロータリーを残すためには、これ以外に方法がなかったのです。この点から國旗掲揚と國歌斉唱の習慣が生まれました。現在では極く普通の例会風景も、実は國家への忠誠心を示すために考えられた、この当時の歴史的な名残だといわれています。

1938年の地区協議会において、第70区がR Iの中央集権組織から離れて自治権を持つという提案を提出する準備のため、研究委員会を組織するという提案が、東京クラブから出されました。これに基づき、宮脇PGを中心に行なわれたのが、俗に「宮脇案」と呼ばれる、日清ロータリー連合会の原案です。協議の結果、この案を取りまとめて、1939年の地区大会に提案することになり、この決議に基づき、芝染太郎は特派代表として、同年開催のクリープランド大会でR Iとの交渉に当たります。

出発に先立ち、米山はR I会長に宛てた報告書を、芝に託しています。まず前会長ウィル・メニアの「歴史と風俗と習慣とは各國悉く異なり。故にこれを統一的に取り扱わんとするのは誤りにして、思想上の傾向に適合せしむべく各々自由ならしむべし。」の言を引用し、「東西欧州ではまだ風俗習慣が違っているが、ロータリーの目的は明白であるから、これ

を忠実に実現出来れば、他の細項は各区の自治に任せよるので、ロータリーの開拓ボール・ハリスさえ、ロータリーの倒産すべき運命に迷惑せんとせば、ロータリーは常に徐々に進化し、又或る場合には急進的改革をも必要とすると言っている。大会参列の諸君はこのR I機構の進化変遷の必要に注目し、第70区が提案する機構改正に虚心坦懐検討されることを希望する。余は急進的改革を希望するのではない。ただその進化を促進し、将来的の宿題に適応させる必要を認めるものである。隣邦第79区ガバナー、ジョン・セク博士は最近死亡したが、その数日前余の所論に共鳴し、一緒に支那のロータリー拡張と永久性のために共同してつくみたいと述べた。」と結んでいます。

これは立法委員会に提出され、その際、芝染太郎は米山から託された前述の書簡を読み、その全文が大会議事録に発表されました。

以上のような経緯を辿って、この提案はR I理事会の付託となり、1939年7月から、日本の第70区が70、71、72区に分割。日清地区46クラブが、自治地域制度の適用を受けることになります。

第1回日清ロータリー連合大会は、1940年5月横浜で開催され、会長には米山が選ばれます。これが戰前の日本ロータリーの最後の大會となりました。

ここで、特派代表として、R Iとの交渉に当たった芝染太郎について触れてみたいと思います。

芝は1870年愛媛県宇和島近郊生まれ、1894年に単身ハワイに移住。ジャーナリストを志してハワイ新報に入社し、1905年に同社を買収して社主に。芝染太郎は1916年母国にジャパンタイムズに入り、1921年には買収して同社の社主となります。

関東大震災直後東京RCに入会。米山との親交も厚く、1937年に第70地区的幹事に就任し、クリープランド大会に特派代表として出席。彼の著作『日本の国アメリカ』には、日清ロータリー連合会の交渉にあたり、友人への土産である日本刀を携えてR I本部を訪れ剣舞を披露し、もしこの提案が通らなければ切腹も辞さない、と語ったと記されています。そ



芝染太郎

の気迫が功を奏してか、R I が日清ロータリー連合会の存在と自治地域の適用をしらしめたといふのが真相のようです。

芝は、1908年発足した日清ロータリー連合会の幹事を務め、R I 脱退とともに茨城県鹿島に移住。地元で「晴耕会」という、R Cと同じような組織を作り、1949年に79歳で逝去しました。

ドイツ、オーストリア、イタリア等のクラブが解散し、日本でも解散を真剣に考えるクラブがでてくる一方、彌正による解散に先立ち、國際ロータリーから自発的に離脱し、別組織として、その精神性を維持する方法を選ぶべきだという意見がでて、クラブ間の調整が取れない状態になります。

日清ロータリー連合会は緊急会議を開催し、クラブ存続の決議をしましたが、8月8日の静岡RCを皮切りに解散が続いたため、9月4日、日清ロータリー連合会はR I から脱退し、独立の日清連合会を組織することを決定します。東京RCの解散決定は9月11日。米山は最後の挨拶をしました。

9月11日、日清連合会は、新定款を起草し、25日の会合で採択。この会の名称を「七曜俱楽部連合会」とします。各クラブもR Cの名前こそ外したもの、各団体と名を変え、従来同様、毎週一回の例会を開いていました。

戦争が始まり、物資の欠乏と共に、弁当持参や、誕生日のケーキの代わりに水飴を贈った（東京クラブ）というエピソードも残っています。その後例会場の軍接収、空襲による破壊などにより、集まる場所を転々と変えたり、例会が休会となり、物資統制のため、週報が年に数回しか発行されなかつたという記録も残っています。大阪金曜会では、月初めの例会では宣傳の詔勅が朗誦され、卓話も統制経済、輸送、兵器、食料問題、大政翼賛会の話題が多かつたそうです。

ロータリーの組織が壊滅しても、その活動が継続されたことは、驚異的な事実です。戦前の日本のロータリアンの心に、ロータリーの理念が理解されていたが故、組織がなくても、運動自体は何ら変わることなく継続されていたのでしょうか。しかし、P・ハリスやシェルトンの奉仕理念を語ることは不可能であり、国教や相撲講などの東洋的思考からロータリーを語らざるを得ませんでした。その名残が現在にも引き継がれているように思われます。

1946年、日本ロータリーの創始者である米山と福島が相次いでこの世を去り、翌年1月にはP・ハリスも78才の天寿を全うします。

1947年7月の記録では、當時各団体と名称を変えて例会を統一しているクラブは18、会員数は1,050。各団体の例会には、駐留軍として在日していた連合国軍のロータリアンが再三訪れ、盛会であったと言われています。

1948年9月1日、R I 中央アジアの諸事務総長G・ミーンズが訪日。東京水曜会の例会に出席。また、大阪その他の七曜会を訪れ、日本のR Cが、脱退以前と変わることなく例会を開いている状況を、R I に報告します。

1949年3月9日にミーンズは再訪日。R I 理事会が日本のロータリーを復帰させる決定したことを知らせます。この吉報を受けた協議会は各クラブに知らせ、東京水曜会は3月16日に解散。3月23日にチャーチメンバー157名で創立総会を開催し、3月29日にR I から以前の登録番号855で認証を受けます。これに続き京都、大阪、名古屋、神戸、福岡、札幌の7クラブが順次R I に復帰し、第60地区として戦後の日本のロータリー運動が再開されます。東京RCのチャーチナイトは、同年4月27日に開催。マッカーサー元帥（後に東京RC名誉会員）や吉田茂首相からの祝辞が披露されました。

公職追放者を会員として認めるか否かが、大きな問題点でしたが、日本側の主張が受け入れられ、日本のロータリーは戦前の指導者を失わずに再出発できました。R I 脱退中も非公式例会運営が大きな評価を受け、条件付で、クラブ固、個人懇親会に、この期間を含めることができます。R I 戻帰に際して、次の条件が付けられました。<sup>①</sup>離脱中の七曜会の解散<sup>②</sup>R I の定款・細則の厳守<sup>③</sup>R I への義務の完全履行。更に、「各クラブはそれぞれR I に直結しているので、クラブが地区や国家単位で固まつて行動を起こさない」ことを誓約し、戻後の日本のロータリーは歩み始めます。

日本ロータリーの歴史については、R I 脱退と戦災の影響で、現在残っている資料が極めて少ないのが実情です。今回の話を通じて、日本の先進ロータリアンのロータリー運動に対する真摯な取り組みを思い起こすと共に、今後のロータリーライフに役立てていただけましたら幸甚です。

## 青年米山梅吉の サンフランシスコ滞在時代（前編）

井口賢明（沼津北RC）

なった。主にこの資料から、福音会のこと、米山の福音会との関わりを見てみる。

### 【渡米前夜】

米山梅吉は1887(明20)年、アメリカに渡った。

數えで20才の時である。そして8年後に帰国している。

このアメリカ時代のこととは、まず待っていない。これまで、『常識開門』所収「思い出」の記で自身が述べているように、オハイオ州ウエスレアン大学とニューヨーク州ローチュスター大学、カリフォルニア州のベルモント・スクールに修学したこと、1893(明26)年のシカゴ万博で日本出品の販賣員をしたことがわかっている。ただ、これも、その内容となると、何かもやがかかったようで、具体的なことが見てこない。

米山は、渡米した後何年かをサンフランシスコで過ごした。サンフランシスコでは、福音会の世話をしたり、これを拠点としたことはある程度わかっている。しかし、具体的な内容になると杳としてつかめてこなかった。

1997(平09)年7月、『福音会沿革資料』(阪田安誠外編 現代史料出版)という書物が出版された。これは、福音会の経過や当時の例会の記録を再現したものである。これに先行して、この資料を分析した学者の研究論文である『在米日本人社会の黎明期』(同志社大学人文科学研究所編 1997(平09).02.25 現代史料出版)が刊行された。

これによると、米山がサンフランシスコ滞在中、福音会の運営に深く関わっていたことが知れた。しかし、この資料によても、米山がサンフランシスコ滞在中、どのような生活をしてきたのか一例えば当初は福音会の寄宿舎に寝泊りしていただろうがそれがいつまで続いたのか、生活の趣はどうなっていたのかなどは、イメージとして浮んでこない。それでも、これまでわからなかったことのいくつかが明らかに



明治19年ごろのサンフランシスコ パレスホテル  
日本人がよく宿泊した（『米國今不審謹』より）

一方、東京では、福沢諭吉、武藤山治『米國移住論』(明20.09)、田口卯吉などが渡米熱をある文章や書物を発表していた。サンフランシスコから一時帰国した米山貫一は、若者に渡米を呼びかける。実際、ディスクネル著富田源太郎編訳『米國行徳案内』(明18.10)、赤峰源一郎『米國今不審論』(明19.10.15)、石田限治郎編訳『来れ日本人 一名桑原旅案内』(明20.02)など、こと細かな渡米の方法やサンフランシスコでの暮らし方などの指南書まで出版されるようになった。



明治18年ころの東京英和学校（現青山学院）校内（『青山学院九十年史』より）

米山は、1886(明19)年の末、東京英和学校に入った。青山学院の前身である。米山が後年青山学院と関わることになった発端である。しかし、米山がなぜ、東京英和学校を選んだのかわからない。ここは、キリスト教のメソジスト派によって、創立、運営されていた。米山がキリスト教、とりわけメソジスト派に興味を持っていたとは思えない。ましてや、メソジスト派と関係するサンフランシスコの福音会のことを知

り、ここを選んだわけでもないであろう。1886(明19)年末には、米山がはじめた福音会の銀座夜学校がすでにできていた。したがって、具体的な渡航計画があったのであれば、東京英和学校でなく銀座夜学校を選ぶのが早い。

このことを考えると、以前渡米という想いを温めていたにしても、米山が具体的に渡米の意を固めたのは、1887(明20)年、銀座夜学校に移った時といってよさそうである。いずれにしても、米山は、銀座夜学校に移り、サンフランシスコ福音会の支会というべき東京福音会の会員となつた。

当時、横浜からサンフランシスコへは、定期航路が開かれていて、8隻の船が就航していた。一つは、太平洋郵船会社(Pacific Mail Steamship Co. 以下P.M.社という)で、シティ・オブ・ベキン、シティ・オブ・ニューヨーク、シティ・オブ・シドニー、シティ・オブ・リオデジャネイロの4隻。もう一つは、西・東洋汽船会社(Occidental & Oriental Steamship Co. 以下O.O.社という)で、オセアニック、グーリック、ベルジック、サンパブロの4隻である。これらは、サンフランシスコから横浜に寄港後、船によっては神戸、上海に寄り、最終は香港であった。そして、香港で折返し、横浜、サンフランシスコに向かう。往復では2ヶ月である。したがって、8隻では、計算上、待機期間も入れて10日に1度サンフランシスコに向う船が出ていることになる。当時としては、頻繁に出ていたなという感じであるが、それだけの需要があったことである。

この中で、米山が乗船したのは、P.M.社のシティ・オブ・ニューヨークである。「思い出」の中で「書生で初めて亞米利加に渡航したときの船は、シティー・オブ・ニューヨークと云つて、三、四千頭のものであった」と、自ら述べている。『北太平洋定期客船史』(三浦昭男 平06.09.25出版)によれば、この船は、1875(明08)年に竣工し、当初は、サンフランシスコとシドニーの定期航路についていた。その後、1885年(明18)年から北太平洋航路に目された。この船の詳細はわからぬが、シティ・オブ・サンフランシスコと同型船であるという。この船は、総トン数で3000トンである。シティ・オブ・ニューヨークもこの程度と思われる。ちなみに、このころの横浜港は、大荷揚ができていなかった。このため、大型船は直接岸壁に接岸できず、沖合に停泊している船に埠で乗船しなければならなかつた。

同社によれば、この船は、1875(明08)年に竣工し、当初は、サンフランシスコとシドニーの定期航路についていた。その後、1885年(明18)年から北太平洋航路に目された。この船の詳細はわからぬが、シティ・オブ・サンフランシスコと同型船であるという。この船は、総トン数で3000トンである。シティ・オブ・ニューヨークもこの程度と思われる。ちなみに、このころの横浜港は、大荷揚ができていなかった。このため、大型船は直接岸壁に接岸できず、沖合に停泊している船に埠で乗船しなければならなかつた。

海外渡航に、旅券を所持することが要求されるようになった。この旅券の取得には、「別紙様式の書面を以て外務省又は開港場官廳へ提出之を受取るべし」とされ、手数料50銭が必要であった。しかし、「内地に於て右旅券受取間合之なき」とときは「其國在留の日本公使館又は領事館へ其趣を記載せる書面を出だし自身出頭して」受取るとされていた。この場合には、手数料が2円であった。

規定された旅券顕書の様形を見ると、本籍あるいは住所、族称、職業などを記載し、戸長がその内容を確認し、府知事か県令がこれを証明することを求めていた。なお、「海外旅券規則」は、1899(明33)年に改正され、新たに「外國旅券規則」が制定され、ここでは、戸籍謄本を添付することが必要であった。しかし、その以前は、戸籍謄本の添付が必要なかつたようである。

ところで、米山は、横浜から出港した。したがって、外務省か開港場である神奈川県で発給されたものと考えるのが普通である。しかし、外務省、神奈川県での旅券発給の記録に米山の名前が残されていない。米山が滞米8年もの間、旅券を所持していなかったとは考えにくい。これについて、次のように考えられないであらうか。

米山の養子縁組前の本籍は、東京である。米山は、渡米の準備をしていて、旅券を得るために、和田姓で東京府知事の証明のある旅券取得の願書を得ていた。これで、出港直前に横浜で旅券を得るつもりであった。ところが、急速米山家との縁組が具体化した。このため、和田姓から米山姓となった。そうすると、従前、用意した願書を使うと、旅券が和田姓となってしまう。かといって、米山の養父の本籍は静岡県長泉村である。米山姓での旅券取得の願書の準備は間に合わない。これを避けるため、既に準備してあった書類を使わないで、「内地に於て右旅券受取間合之なき」ということで、サンフランシスコの領事館で旅券を取得した。

これは、想像の域を出ないし、それ以上に、



福音会英語夜学校設置届書（『基督教九十年史』より）

米山とともに乗船したと思われる杉原彦太郎、青木富吉、内藤第三郎の旅券発給の記録もないことである。この点、今後の調査にまちたい。

ここで、米山の渡米の時期をもう少し検証してみる。

『福音会沿革史料』のなかに、1887(明20)年11月5日第一土曜日の例会について、次のような記載がある。

今夜東京福音会員米山梅吉、杉原彦太郎、青木富吉、内藤第三郎の四氏を会員に紹介したり。又山上修二郎、川島喜一郎、矢田部安吉、山本一郎、眞鍋宗三郎の五氏を会員に受け取りたり。

他の5人について、「五氏を会員に受け取りたり」とあるのに、米山ら4人は、「紹介したり」である。これは、米山らが既に東京福音会に属していて、東京からサンフランシスコの福音会に転籍という扱いだからであろう。

1890(明23)年当時、福音会には、「1ヶ月以上の試験で」入会を認めるとの規約があった。その以前も同様であったと思われ、必ずしも直ぐに入会できるというわけではなかった。美山が福音会を立ち上げた当初は、サンフランシスコへの上陸者も少なく、直ぐにも入会できたであろうが、このころになると、人数も多くなり、ある程度の審査が必要とされたことからであろう。しかし、米山は、直ちに入会というより転籍が認められた。

いずれにしても、米山は、11月5日にはサンフランシスコに着いていた。もし、その前に着いていれば、11月5日ではなく、その前の例会に出ていたであろう。

ところで、当時は、横浜からサンフランシスコまで17日前後要した(『来れ日本人』)。17日とは、丸17日間ということで、日数としては、18日目にサンフランシスコに着くことになる(実際には日付変更線を逆に進むので、同じ日を2日経ることになり、実質19日目)。

米山のこの船が正確に何日かかっているか定かでない。しかし、ほぼ1年前の1886(明19)年12月2日朝10時に、同じシティ・オブ・ニューヨークでサンフランシスコに渡った人の記録がある。

これによれば、12月19日午後4時20分ゴールデンゲートを通過し、夕方サンフランシスコ港に着いたという。日付の上では、18日目である(実質19日目)。このとき特別な荒天ということでもなかつたようである。また、局崎行雄は、米山より3ヶ月後の1888(明21)年1月31日朝10時30分に横浜を出航している。サンフランシスコに着いたのは、日付の上でやはり18日目(実質19日目)の2月17日朝4時であった(『歐米漫遊記』)。この船は、シティ・オブ・ペキンで、5080総トンと米山乗船の船より2000トンも大きい。『米國今不審議』の著者赤峰潮一郎は、船の名前はわからないが、1880(明13)年7月10日朝10時に出港し、サンフランシスコに18日目の7月27日早着している。

これらのことを考えると、米山乗船のシティ・オブ・ニューヨークも日付の上で、18日目にサンフランシスコに着いたと考えられる。これに迷うシティ・オブ・ニューヨークの就航状況である。当時の新聞に、横浜発着の船の記事がある。多くは船の名前や船会社の名前がないが、横浜で発行されていた『THE JAPAN WEEKLY MAIL』という英字紙には、船会社や船の名前が載っている。この1887(明20)年10月15日付、22日付の記事に、

P.M.社のシティ・オブ・ニューヨークが10月11日に香港を出たこと

これが10月17日に横浜に着く予定であったが、1日遅れの10月18日に横浜に着いたこと 横浜に着いた後、10月19日に米国サンフランシスコに向かって出港する予定であったが、実際にも同日サンフランシスコに向かって出港したこと の記事が載っている。

サンフランシスコに向け、平均して10日に1回程度出航する定期船があるとしても、ある特定の船では、2ヶ月に1回である。米山が乗船したのは、このときの船しかないことになる。

すなわち、米山は、1887(明20)年10月19日に日本を出港し、18日目の11月5日にサンフランシスコに着いた(ただし、11月4日の可能性が

全くないではない)。そして、夕方までには福音会の宿舎に旅装を解き、旅の疲れもそこそこに、夜8時からの福音会11月5日第一土曜日の例会に出たことになる。

ここで注目したいのは、11月5日という日である。これまで、米山の渡米は、1887(明20)年12月末とされてきた(『米山梅吉傳』の年表に「年末 渡米 桑港着」とある。これを基にした『米山梅吉の足音』の年表も同様である)。また『傳』の佐々木邦「創意と奉仕の一生」では、「米山さんがアメリカに出発した年月はハッキリしない。明治二十年も稍押し詰まって入籍しているから、二十一年早々だったろうと想像される」とし、1888(明21)年初めという。

このように、12月あるいは翌年1月とされていたのは、戸籍上、米山家への入籍が1887(明20)年10月6日となっていることが一つの理由となっている。旅券を米山姓でとるとすれば、このような日になるであろう。しかし、実際には、入籍から半月余りした10月19日の出港である。このことを考えると、前にも触れたように、既にアメリカへの渡航の準備を整えた段階で、縁者から米山家との関係をしっかりとしておくようにとすすめられ、急遽入籍の手続をしたように考えられる。なお、『在米日本人史』では、米山が1886(明19)年の渡米となっている。

ちなみに、同じ手法で、米山の帰國の月日を調べてみる。

福音会の1895(明28)年10月20日発行の会報31号の会員消息の欄に、「数年間本会の柱石として会務に尽されし松原庄、米山梅吉の両氏は去る十二日の便船にて帰郷されたり」とある。一方、1896(明29)年4月18日発行の会報32号は、米山が1895(明28)年10月6日(土曜日ではない)の例会で、「桑港の現状、日清戦争の東都に与へし反響等」という演説をしたことの記事、10月13日「午後8時会員一同……米山……四氏の送別会を本会会堂に開く」という記事がある。31号の帰郷したという12日か32号の送別会をしたという13日のいずれかが誤記、もしくは転記ミスということになる。

ここで、『THE JAPAN WEEKLY MAIL』の1895(明28)年10月19日、26日、11月2日のサンフランシスコから横浜港に入港予定の船、入港した船の記事を見ると次のとおりである。なお、米山帰国のころのP.M.社の定期航路就航船は、シティ・オブ・ペキン、シティ・オブ・リオデジャネイロ、チャイナ(2代)、ペルーであった。

#### 入港予定の船

- 10/29 P.M.社のシティ・オブ・ペキン
- 11/5 P.M.社のチャイナ
- 10/22発サンフランシスコ発ホノルル  
経由  
[10/22はホノルルを出港した日か]

#### 到着した船

- 10/13 P.M.社のシティ・オブ・リオデジャネイロ  
9/24サンフランシスコ発
- 10/18 O.O.社のゲーリック  
10/1サンフランシスコ発
- 10/28 P.M.社のシティ・オブ・ペキン  
10/12サンフランシスコ発



米山が帰郷の際、乗船したであろうシティ・オブ・ペキン(北太平洋定期客船史より)

このようしたことから、米山は、10月12日サンフランシスコ発のP.M.社のシティ・オブ・ペキンに乗船して、アメリカを出港した。そして、横浜到着予定は10月29日であったが、航海は順調で、予定より早い10月28日横浜港に着き、帰国したということになるであろう。

(次号につづく)

## 回顧

### 坂本 豊美(静岡東RC)



平成22年2月9日の午後であった。長泉ロータリークラブが創立25周年になるのでその記念会に出席するように、とのお説いの電話をいただいた。私は、現在の健康状態では出席できないことを申し上げて辞退した。ベッドに入りて色々のことを思った。

その日は丁度、私のガバナー年度のライラが御殿場のYMCAで行われていた。長泉RCから電話で、国際ロータリーから認証状が届いたので、ガバナーのサインがほしいという連絡がきた。私は長泉の米山記念館に戻り、認証状にサインした。私にとっては年度最初のクラブ誕生であった。漢字にしようか、ローマ字にしようかと考えた末、ローマ字で名前を書いた。

新しくガバナーになる国際協議会に出ると、新ガバナーに地区に新しいクラブを創立することが要請される。しかし、一つの新クラブを創立することは必ずしも容易ではない。スポンサークラブを委嘱し、ガバナー代理を依頼し、クラブの会員の協力によって一つのクラブが生まれるまで、かなり日数と会員の協力を要するのである。

長泉RCは、沼津北RCをスポンサーとして創立されていたクラブで、当時のガバナーである私は、何の苦労もなく認証状にサインする光景に浴したのである。私の年度に生まれた唯一のクラブであった。

年度が変わって、長泉クラブ創立のチャーターナイトが行われた。その時記念品としていただいたのは『米山梅吉』と題する大きな本であった。佐々木邦さんの米山梅吉伝と米山梅吉翁と周囲の深い方々の文章を始め膨大な内容の本であった。私は、米山翁については平均的な知識しかなかった。この一冊



長泉RC創立総会（1985年4月28日）

によって教えられることが実に多かった。

長泉には米山記念館がある。これは日本のロータリーのガバナー・ミニーが国際協議会に出席する折、ロータリーの創立者であるポール・ハリスのお墓にお参りすることが恒例となっている。それなら最初に日本にロータリークラブを創立した米山さんのお墓にお参りすることが当然のことではないか。幸い長泉に米山家の旧居やお墓がある。記念館を建てようとして生まれたのが米山記念館である。そのところに長泉RCが創立されたのである。必然的に米山記念館と深い関係となる。米山記念館をお守りするようななかたちになっていた。当時記念館は、いつも閉めており、来館者があると、近くの米山隧道の米山晴雄さんのところに保管されている鍵を借りて記念館を開けて、案内するという状況であった。長泉RCの会員がこれに当たったが、然しこれ来るともわからない来館者の対応に、クラブ会員の諸君達もくたびれてきた。これを何とかしてほしいという要請が地区諮詢委員会に申し入れたが、米山記念館は独立法人であり、地区組織と関係があるようないような状況で、どうすることもできなかった。

そんなとき、突然私が大河原理事長のあとをうけて理事長に指名された。全く想いがけないことであった。何で自分が指名されたのか。再三詮議したが、結局受諾することになった。沼津北RCの事務所に保管されていた資料を見て、当時の当地域の人々や東京RC始め有志の並々ならぬ協力によって、記念館が建設されたことを知った。土地150坪は米山性三さんの提供、建築費は1700万円であった。維持費として359地区会員年100円の寄附で運営することになった。(後に地区組合が変わり、359地区は神奈川県、262地区が静岡・山梨県にわかつた。)

そして262地区会員は年300円の負担をお願いすることになった。これだけのお金で会館を運営することは困難であった。

建物が古く、周囲の土地は荒れていた。常務理事の横田裕男さんと頭を悩ました。米山さんの隣者である女性に常勤をお願いしたが、長続きはしなかった。米山獎学会

の「米山だより」にならって「藍藻」と題した小冊子を作り、全RCと地区に配布し、100円募金をお願いしたが効果はなかった。

このような状況をいつまでも続けていいものか。近くには○○記念館、△△美術館等新しい施設が作れるようになつた。このままでよい

のであろうか、という想いが頭をよぎった。幸い、隣接する850坪の土地は児童公園となっているが、何口ガバナーの時にロータリーが米山家から購入したものだと聞いている。(その詳細については私は全然知らない。)

この土地が利用できれば、立派な記念館ができるのになあと考えた。

そこで、近隣のRCの会長さん達に集まってもらって現状を話し意見を聞いた。みな何とかしなければならぬと思っていたが、新館を建設することについては、建設資金、新館維持費その他のことを考へると容易ならぬことであり、趣旨には賛成であるが、実行については慎重な意見が続出した。そんなことがしばらく続いた。そして中村泰次郎年度で、米山記念館を支援する決議をいただいた。翌年の内藤成雄年度の地区大会の懇親会の席上で、R.I.会長代理として来られた東京RCの玉村さんから、想いがけない話を聴いた。東京RCは明年創立75周年を迎える。記念事業を考えているが、この不況の折、適切な事業が見当らない。米山記念館再建の話を聞くが、それが行われるならばそれに参加することも記念事業としてはどうかとの話が出ていた。ということであった。私は記念館建設設計画の話をして協力をお願いした。そして新館第一第二記念館建設を決意したのであった。

そして内藤ガバナーに話をし、内藤ガバナーと理事長名で第二記念館建設のことを全国に呼びかけたのであった。

最初の募金募集趣旨には、色々な反応があった。米山記念館のことを知っているロータリアンは少なかった。知っていても、米山獎学会の付属の機関と考えている人もいた。また、米山獎学会には200億近い金がある筈だ、その中から出せば良いという意見の人もいた。

二回目は、最初の趣旨説明の疑問に応える形で出したが、反応は弱かった。記念館には人手が少なかった。容易に事務が進まなかった。その時、審査会長



を始め長泉RCの会員達が一丸となって協力してくれたのである。そして、未だ入金していないクラブにも手紙を出してくれた。そして続々入金するようになった。長泉RCに全く助けられたということである。大口寄付金としては、米山獎学会五千万円、長泉町二千万円、東京RC二千万円を得て目的を達成することができたのであった。

今にして思うことは、私は未熟であった。日本のロータリー全体についての認識は甘かった。日本の30近い地区の中の一つの地区が何かしようとして各地区に呼びかけたとしても、各地区がすぐに応じるような体質ではなかった。ボリオキャンペーンはR.I.本部からの呼びかけであり、全世界のロータリーが呼応した計画であったから当然順調に進んだのであった。地区のガバナーと平凡なバストガバナーである理事長の名で、たとえそれは日本ロータリーの米山さんのことであったとしても、すぐ呼応するような体質ではないことを知らなかった。特に思うのは、最初の米山記念館建設にあたって、東京RCが米山さんは自分達のクラブ会員であるとして、積極的に建設につくされたことに気がつかなかったことであった。当然、その記念館を建て直すについてには、玉村さんの話を持つまでもなく、東京RCを始め関係方面に呼びかけ、特に記念館創立当時の359地区(神奈川・静岡・山梨)であった神奈川地区に呼びかけ、支援を依頼すべきではなかったか。と今にして思う。そうしたことの配慮もなく助言もなく、ひたすらに建設のことのみ端過したことは、全く未熟の一語に尽きる。幸い、全国のロータリアンの援助によって記念館建設ができたのは、ひとえに米山翁の遺稿とロータリアン各位のロータリーに対する厚い志の體物であったと思う。



記念館は故内藤理事長と井口賢明常務理事の努力により、運営は軌道に乗り、成長発展されていることに心から敬意を表する次第である。内藤理事長亡き後、桂造理事長の下で更に豊かな内容の運営をされることは有難いことである。今後の発展を心からお祈りする。

## 米山梅吉著『幕末西洋文化と沼津兵学校』と 幕末幕府オランダ留学生について



米山梅吉は、昭和9年66歳の年に『幕末西洋文化と沼津兵学校』を著した。この著書を読むと、経済人が書いた書物としては大変な分量、大作だと思わざるを得ない。米山がどの程度の準備期間を経て、この著書を完成したかは分からぬが、この時期、三井銀行の常務は退いてはいたものの、ロータリークラブでの熱心な活動は当然のこととして、三井合名理事、三井信託社長、三井報恩会理事長、信託協会会長と要職を務めており、とても時間的に余裕がある状況であったとは考えにくい。著書の大筋は「幕末西洋文明の流れと接触」、「沼津兵学校の発足と終焉」、「激論」の三部構成となっている。

米山が、多忙な中でも自らこの著書で明らかにしておきたかったことは、①自らが学んだ中学の前身が沼津兵学校であったこと、②短期間ではあったが西洋文化の寄港地としての沼津並びに沼津兵学校の果たした役割の大さきを記録しておくこと、③明治維新以降の教育体制への不満等々があったからではないか、と推察される。特に感ずるのは、米山は、明治初期に沼津兵学校並びにその後身の沼津中学校が果たした教育の役割の大さきを、維新という大きな変革の中にあってもけして色あせるものでなく、むしろ教育・教育機関という在り方において、明治政府の中央集権的且つ獨裁的教育より優れた特色をもった学校であった、ということに強い誇りと愛情を持っておられたということである。

この、特色ある沼津兵学校の初代頭取（校長）を務めたのは、西周である。西は哲学、芸術等の説話を作り出した人物であり、また啓蒙思想家として知られているが、幕府が幕末海軍育成のため、オランダへ派遣した留学生の一員でもあった。ここで幕末の幕府オランダ留学生と沼津兵学校の関係について触れてみたいと思う。

米山が生まれる5年前の文久2年（1862年）、徳川幕府は海軍育成を主な目的として、オランダへ軍艦建造（開陽丸）を依頼するとともに、留学生を派遣することとした。当初軍艦建造の依頼、並びに留学生先はアメリカを予定していたが、南北戦争の勃発と

津田 昭（河口湖RC）

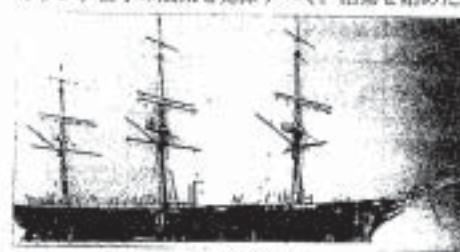
ともに、アメリカ政府より軍艦の建造並びに留学生の受け入れは困難、との意向が示されたため、徳川から海軍伝習等で親しかったオランダへ留学生を変更したものである。この時代、日本人が勉学の為留学生としてヨーロッパへ派遣されるのは、



西周  
極めて国際的な出来事であり、このことはその後続く、多くの海外留学生の先駆けとなった。

留学生は、大まかに分類すると①海軍士官の養成目的から「軍艦組士官」の内田恒次郎（海軍諸術）、榎本武揚（機関学）、澤太郎左衛門（砲術）、赤松用良（造船）、田口俊平（海軍諸術）。②それに士官ではないが、海軍運営のうえで必要な諸技術を持った人間が必要ということで「職方」と呼ばれる7人、水夫・古川庄八、同・山下岩吉、鈴木士・中島義吉、時計士・大野弥三郎、船大工・上田虎吉（沼津戸田の出身であり米山と同郷ともいえる）、鍛冶職人・大河喜太郎（アムステルダムで死亡）、官大工・久保田威三郎（長崎まで同行したが肺病が悪化し渡欧せし）、③番所調所（後の開成所）から人文科学を学ぶ目的で西周、津田寅道、④医学を学ぶ目的で医師・伊東玄吉、林研海の以上総勢16名であった。

慶応元年（1865年）、オランダライデン大学にてフィッセリング教授に生理学、國際法学、國法學、經濟學、統計學等を学んだ西と津田が、学業を終えて帰国する。二人は、帰国と同時に開成所教授手伝に就任し、オランダ留学の成果を発揮すべく、活動を始めた。



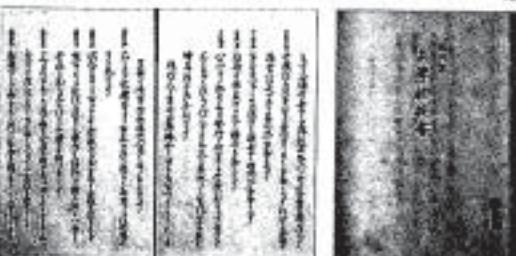
開陽丸（1866年）

それに遅れること2年後の慶応3年（1867年）、完成した開陽丸とともに赤松、伊東、林を除く土分並びに職方が帰国する。

米山が誕生した慶応4年（明治元年1868年）には、幕府が崩壊したことによって、赤松、伊東、林も相次いで帰国せざるを得なくなってしまった。オランダ留学生も、帰國と同時に大政奉還、明治新政府発足という時代の大きなうねりの中に投げ出され、榎本、澤を中心とした蝦夷地に新たな開拓を求めて新政府に立ち向かう者と、西、赤松、津田をはじめ、引き続い徳川家に仕える者の二方に分かれることになった。

徳川家は、大政奉還とともに駿河府中70万石に封ぜられ、当主徳川家達並びに幕臣の多くが、静岡へ移住することになった。

そして、明治2年1月（1869年）、沼津兵学校が徳川藩の隨軍兵学校として開校する。この学校の初代頭取（校長）に任命されたのが、オランダ留学帰りの西周である。西は、頭取に就任するとともに、早速、徳川家兵学校校書を作成し、学校の基礎を築いていく。



徳川家兵学校校書

同じくオランダ留学組の赤松が、数学担当の一等教授として就任している。また、この時期オランダ留学生組の津田が静岡開港場、林が静岡病院で活躍している。米山が著書で述べているようにまさに沼津（今も静岡）は西洋文明の寄港地となっていたわけである。

西、赤松ら教授陣は、数年で沼津兵学校を離れて新政府に出仕するようになった以降も、官吏として有能だったばかりでなく、人文科学全般、造船等それぞれの分野で活躍し、新生日本の発展に大きく貢献した。

また、沼津兵学校並びに米山をはじめ沼津中学校出身者の多くが、幅広い分野で活躍した。このことを考えると、当初オランダ留学が目指した幕府海軍の育成という目的は、幕府崩壊により果せなかつたものの、沼津という地でオランダ留学の成果が新たな形で活かされ、結実したと見ることもできるのではないかだろうか。

幕府オランダ留学生がオランダへ旅立った25年後、明治20年（1887年）米山は米蘭のアメリカ留学へと旅立つ。この間相当数の人間が歐米に留学しており、幕末に比べれば、留学自体そう珍しいことではなくなっていた。しかしながら、幕末の留学生が保持していた、公を優先する考え方、知的好奇心の旺盛さ、大きな志等は、米山が留学する時代においても、大きく変化していかなかったと思われる。そういう時代背景に育ち留学した米山は、実業界に入ってもその精神を失わず、我が國にロータリークラブという素晴らしい組織をもたらし、根付かせてくれたのではないか、と考えている次第である。

それにつきかえ、最近、日本人の留学希望者は殺滅しているとの報道を見聞きすると、日本人は公より私、外よりも内、知的好奇心の減少、志の欠如等を感じてしまい、日本の行く末が心配になるこの頃である。

最後に私事で恐縮だが、私は幕末幕府オランダ留学生に対し、シンパシーを強く感じている。というのは、私の母が留学生の一人澤太郎左衛門の曾孫にあたり、子供のころから曾祖父がオランダに留学し、帰国後、榎本武揚らとともに開港五稟等で官軍と戦った、という話を、聞かされていたからである。

當時は何の興味も無かったが、長ずるにつれて興味がわき、最近は、時間があればオランダ留学生の足跡を辿ることを、余暇の楽しみの一つにしている。

先だっても、留学生船大工上田寅吉の故郷、沼津市戸田を訪ねた。彼はオランダ留学前、チャーチ車いりのロシア使節の乗るディアナ号が、津波で破損し使用不能になった時、ロシア人の指導を受け、我が國で初めての洋式帆船ヘダ号（ロシア人を国に雇すため）を建造した時の中心人物である。戸田の造船資料博物館を訪れ、ボランティアの方から親切な説明を受けた際、「上田寅吉の墓を訪ねたいのだが墓所が分かるか」と尋ねたところ、何故訪ねたいのかと問われた。私の母の曾祖父が上田寅吉と一緒にオランダへ留学した仲間である旨を話すと、大変驚かれ、わざわざお墓まで室内をしていただいた。おかげで、無事お参りを果たすことが出来た。これも母の曾祖父のおかげと感謝した次第である。これからも、時間が許す限り、オランダ留学生の足跡を辿ることをしたい、と考えている次第である。

**ロータリークラブ会員さま限定ご優待料金**

四万一千坪の広大な敷地に行む  
優美な日本庭園と数寄屋造りの跡  
純和風のつやえの中で、  
旬の味覚をゆるりとお楽しみ

お食事処プラン		お部屋食プラン	
名さま	田(タ側食付)	名さま	1泊(タ・朝食付)
平日・休日	22,500円	平日・休日	32,500円
休前日	25,500円	休前日	37,500円

●米山梅吉記念館  
伊豆長岡温泉  
20分

特選プランにつきお部屋のご指定はできませんのでご了承ください。お部屋のご指定がある場合には、お1人さま10,000円プラスとなります。(ご新規でないお部屋もございます。) 料金にはお食事のみの料金(タ・朝食) サービス料・消費税が含まれております。入浴料は含まれておません。※プランの料金は1名様~4名様までのご利用料金です。  
※食事のお持ち込みはご遠慮ください。※料金はイメージです。

でかけんか、ほほえんへ。  
**西武グループ** 伊豆長岡温泉 **三養荘** TEL:055-947-1111  
静岡県伊豆の国市まきの上270 平410-2204  
[www.grandhotels.jp/sanyo.html](http://www.grandhotels.jp/sanyo.html) **お申込み・お問合せは、**  
ロータリーとお伝えください。

### 米山梅吉記念館のご案内

#### 開館時間

午前10時～午後4時

#### 休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日  
(5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館 館報

Vol. 17

発行日 平成23年3月10日  
発行者 財団法人米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助  
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1  
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101  
URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>  
e-mail : [yumh@ai.tnc.ne.jp](mailto:yumh@ai.tnc.ne.jp)  
印刷 フタバ印刷株式会社